滋賀県山スキー旅の思い出

2015.3.11（東日本大震災4年目の日に）　広島県　西部伸也

　最初にお断りしておくが、「滋賀県」であって、「志賀高原」ではない。比良山系の武奈ヶ岳こそ1200mを超える標高ではあるが、1000mに満たない山が続く、高島トレイル。そんな山並みではたしてバックカントリースキー（山スキー）が十分楽しめるのかなとも思っていたが、書籍にコース紹介がないわけでもない。（白山書房『改訂山スキールート図集２』1984年）

　「インターハイの山でバックカントリー」というのが、近年私の登山の一つのテーマでもある。全国に無数といえるほどあるバックカントリーフィールドの中から訪ねてみようと思う山を選ぶとき、一つのきっかけがインターハイの会場地に選ばれることだ。各県で選ばれる山にはそれなりにいい山が多いし、また夏とは違った姿を積雪期に見ることもできる。さらには、インターハイの山を肴に、全国の知り合いたちと一緒に登山ができれば、それもまた楽しい。

　「インターハイの山でバックカントリー」のきっかけになったのは、2011年の青森大会・八甲田山だ。その大会に広島県の総監督として参加していた私は、3日目の総監督隊宿舎になっていた八甲田リゾートホテルに置かれていた『八甲田スキーツアールート図』に魅せられた。ロープウェイを利用して酢ヶ湯温泉まで滑走する「宮様コース」をはじめ、様々なコースが紹介されていた。名には聞いていたが、ぜひ一度積雪期にも訪れたいものだと思った。

　その年3年担任であった私は、3月1日に卒業生を送り出すと、校務にも余裕が生まれ、土日のほか平日にも2日ほど休みを取り、青森まで出かけることにした。2004年の島根大会で同じＡ隊審査員でもあったよしみもあり、青森大会の総監督隊隊長であった俵谷先生に連絡を取ると、快く案内を引き受けて下さった。そうして片道1500kmを苦ともせず、（夏の青森大会の時もそうであったが）車で出かけて行った。1500kmは1日では着かないので、3月中旬水曜日の夕方に広島を出発し、その日の晩は名神高速・多賀SAにて仮眠。翌木曜日の夕方に酢ヶ湯温泉に到着した。ニュースでは聞いていたが、5mの積雪にまず驚いた。俵谷先生が予約してくれていた酢ヶ湯の宿は実に心地良かった。「千人風呂」も申し分なかった。

　翌金曜日、八甲田の1日目は「大岳環状コース」であった。前年の夏にインターハイで登った大岳ではあったが、雪の大岳とその周りの山々は全く別の世界であった。蔵王の紹介などでも目にする「モンスター」（雪を丸々被った樹木）が至るところに林立していた。大岳の南側から東側に回り込むようにして登り、小屋付近から頂上に立ち、そうして最後は酢ヶ湯まで延々と続く白い大斜面を滑って行った。

　2日とも宿に泊まるとお金もかかるので、その日の晩は5mの積雪の一部が除雪されて駐車場になっている中に2人の車を並べ、その間にテントを張って眠った。これもまた快適であった。俵谷先生には青森の名産を色々とごちそうになった。駐車場の5ｍの雪壁にトンネルが掘られ、宿の裏玄関へと近道で通じているのも面白かった。

　翌土曜日の午前中は、ロープウェイを利用しての「銅像コース」の案内を俵谷先生にお願いした。土曜日ともあって、ガイドたちに案内されるツアー客で山は賑わっていた。ロープウェイで登れるこのコースは体力的には楽で、しかも長めの滑降コースが楽しめ、これまた言うことのないコースであった。

　昼に俵谷先生とお別れし、午後、その年のインターハイ新潟大会の会場地でもある神楽スキー場へと移動を開始した。八甲田からの帰りにまっすぐ帰るのももったいないと思い、実は翌日曜日の午前中にやはり新潟大会の山の一つである平標山を計画していたのだ。これは栃木の後藤さんと連絡を取り、落ち合うことにしていた。

　前日は気温が高めで、八甲田と比べて南の山では雨であったのか、平標山の雪は湿った腐れ雪という感じであったが、ともあれ2人で山頂に立ち、満足した。登りは尾根寄りにルートを取ったが、降りは思い切って40度くらいありそうなヤカイ沢の急斜面に飛び込んでみた。すると、湿雪と思っていた雪の層は15cmほどで、その下には固く締まった層があり、ターンをするたびに表面の湿雪が崩れ、10mばかり雪に流されてしまいもした。幸い崩れる雪の量は大量ではなかったので、大事には至らなかったが、雪崩に関する一つの貴重な体験となった。

　以上が「インターハイの山でのバックカントリー」第1回目で、続けてその年のGWには、愛知・岩狭さん、群馬・高橋先生をお誘いし、また広島からは元同僚の高田さんとともに、苗場山の手前になる神楽ヶ峰に登り、滑降した。バックカントリーの初級コースとしてよく紹介されているこのコースは、確かにお手頃なコースであった。そうしてその日の晩は、岩狭さん・高田さん共々、夏に総監督隊の宿舎の一つになる予定の和田小屋に宿泊した。

　2013年大分大会くじゅう山系、2014年神奈川大会箱根山塊でのバックカントリーは、思わぬ積雪といったようなよほどの条件がない限りは難しいであろうが、2015年滋賀大会高島トレイル・比良山系は、最初に述べたようにコース紹介の本がないわけでもなく、また近辺のスキー場の積雪からして、バックカントリーも不可能ではなかろうと思っていた。ただ、中部や東北のメジャーなエリアとは異なり、はたしてどの程度楽しめるだろうかとも思っていたが、近年私は中国山地のバックカントリーコースの開拓を一つの大きなテーマとしており、雪が比較的少ないと思われている中国山地でも意外と多くのバックカントリー適地が存在することに気づいてきた。したがって、滋賀県でも不可能ではないはずだ。そうして久々に「インターハイの山でのバックカントリー」第3回目をこの3月上旬に計画した。今回もまた私は3年担任で、3月1日に卒業生を送り出した身だった。（さらに言えば、この3月末で、一応定年退職となる身でもある。）

（なお、来年の岡山大会では蒜山（上～中および下～中）と朝鍋鷲ヶ山～金ヶ谷山～毛無山が使用されることになっているが、蒜山ではその一部を過去にトレースしたし、また朝鍋鷲ヶ山はこのたびの西地区研修会（2015年1月）で、また、金ヶ谷山を含めてはこの2月に鳥取・冨永さんとトレースした。来年あたりは中蒜山も含めた三座縦走や毛無山にもトライしてみたいと思っている。）

滋賀県バックカントリーは比較的近県の石川・根石さん、愛知・岩狭さんに声をかけてみた。あいにく岩狭さんは別の予定が入っていたが、根石さんは1日目（3/7びわ湖バレイ～武奈ヶ岳の計画）は合流できるとのことで、実際、びわ湖バレイロープウェイの山麓駅駐車場で落ち合った。ところが、残念なことに、娘さんが伝染病である百日咳に罹り、自身も検査を受けねばならないということで、合同での登山はなくなってしまった。

以下は、単独行となってしまったが、第3回目になる「インターハイの山でのバックカントリー」の報告である。結論をかいつまんで言えば、比良山系の一部になるびわ湖バレイ周辺はまずまず楽しめ、高島トレイルの一部になる赤坂山・三国山一帯に至っては、非常に素晴らしいコースだということである。

　3月5日（木）～6日（金）と広島県の高校入試、しかも6日（金）は私の教科である英語の試験があって、その採点業務もあるので、夕方早めに出発することはできないと思っていたが、午後の採点業務が意外と早く終わったので、2時間ほど年休を取って、いったん帰宅し、着替え・準備を済ませて16時半に広島市南区の自宅を出発。

　途中のSAで夕食を取りつつ、およそ5時間後の21時20分、大阪府吹田市の姉宅に到着。かつて大阪府の高校教員（最後は教頭）で、今は中国で日本語教師をしている姉の夫もたまたま帰国していて（ちょうど翌朝、中国に帰るとのことだった）、甥・姪も含めて久々の団らんの時を過ごす。

　翌7日土曜日は朝7時にびわ湖バレイのロープウェイ山麓駅駐車場で石川・根石さんと待ち合わせであった。名神・湖西道路経由で行けば1時間ほどで着くかと思い、6時に姉宅を出発したが、現在私が乗っている軽自動車（スズキ・ハスラーのマツダ版であるフレアクロスオーバー）は、あまりスピードが出せず（アクセルを踏み込めばそれなりに走りはするが、燃費が目に見えて悪化する）、20分ほど遅刻してしまった。ともあれ根石さんと合流すると、上記のとおりすぐにお別れすることになってしまったが、お土産に石川の酒を頂き、こちらからは広島のもみじ饅頭をお渡しし、またいつの日かの合流を願いつつお別れした。

　8時20分にロープウェイに乗り、8時半過ぎに山頂駅からまずはゲレンデの滑降を開始した。すぐに木戸峠への入口と思われる個所につき、スキー板にシールを装着する。ここから比良岳（東肩）～葛川峠～烏谷山（からとやま）～南比良峠～堂満岳（北西尾根）～金糞峠と辿って、比良スキー場跡から比良山系最高峰の武奈ヶ岳（1214m）に至る予定であった。地図で距離や標高差を見ながら、びわ湖バレイから2時間少々で金糞峠、さらにもう2時間少々で武奈ヶ岳、武奈ヶ岳からは3時間半ほどでびわ湖バレイまで戻れると踏んでいたのだが、実はこれが大誤算。烏谷山まではまずまず順調に行ったものの、そこからは意外と時間がかかり、南比良峠の手前ピークに到着した頃には既に11時を過ぎていた。武奈ヶ岳は遥か彼方の雲の中でもあり、この日の行動は南比良峠までと変更。びわ湖バレイからは降り主体ながら、アップダウンも結構あるので、降りもシールを装着したまま行動していたが、南比良峠で打ち切りとなると、ずっとシールを付けていたのではいかにも残念。そこで手前ピークでシールを外し、この日初めての山中滑降を楽しむ。結局、南比良峠に到着したのは、びわ湖バレイ山頂駅を出発してから3時間後の11時半過ぎであった。

　南比良峠で再びシールを装着し、こんどは登り主体となるびわ湖バレイまでの復路であったが、烏谷山～葛川峠、比良岳（東肩）～木戸峠の降りではその都度シールを外して滑降を楽しんだ。なかでも、比良岳から木戸峠へ向けての降りはなかなか趣のある林間滑降であった。南比良峠～びわ湖バレイの復路も往路とほぼ同じ3時間少々で、15時前にスキー場に帰り着いた。最後は少し疲れたので、リフトのお世話になり、山頂駅に戻る。

　（今回、特に烏谷山～南比良峠間のアップダウンなどで時間がかかったが、烏谷山かそれを過ぎたあたりの見晴らしの良い尾根で引き返すことにすれば、所要時間も4時間程度で収まり、稜線から琵琶湖の眺めが得られる天気であれば、いっそう楽しめるかなと思ったしだい。）

　ちょうど16時のロープウェイで山頂を後にし、16時半過ぎに山麓駐車場を出発して、翌日の目的地である高島トレイル赤坂山・三国山への登山基地となるマキノ高原に向かう。

　高原の温泉「さらさ」で夕食を取り、汗を流した後、『車中泊お断り』のマキノ高原駐車場から移動して、数km離れた道の駅「マキノ追坂峠」にて車中泊。軽自動車ながら、「遊べる軽」と宣伝しているだけあって、車内で快適に睡眠。

　翌8日日曜日、6時前に道の駅を出発して再びマキノ高原へ。昨晩到着した時は既に暗くなっており、雨も降っていたが、この日の朝は天気も回復し（目的地となる遠くの山の稜線はまだ雲の中だが）、あたりの景色がよく見える。リフトは撤去されているものの、家族向けのスキー場・スノーフィールドとして営業が続けられているマキノ高原だが、駐車場からすぐの下部ゲレンデの標高は百数十ｍと低く、あたり一帯に雪はほとんど残っていない。白く見えるのは標高300ｍくらいから上の斜面だけだ。したがってすぐにスキーを装着というわけにはいかず、ブーツ共々スキー板をザックに取り付けて、運動靴で登山道を登って行く。階段状になった登山道も終わりかけ、標高350ｍあたりになると雪も増してきて、以後途切れることはなさそうなので、そこでザックからスキーを取り外し、シールを装着。しばらくは緩い傾斜の尾根道が続く。やがてやせ尾根、沢沿いの道を通過して、堰堤脇の右手の急斜面が登路となるが、ジグザグ登高でひと踏ん張りしてクリア。以後、赤坂山山頂まで、特に難しい個所はない。途中で出会った大阪からの年配登山者2人パーティーとほぼ行動を一にしながら、駐車場を出発して3時間20分後に、赤坂山山頂に到着。あたり一帯は白い大斜面が広がっているようだが、ガスで視界はきかず、また北西風も強い。

　ピーク東側の斜面で風を避けつつ大休止を取るが、一向にガスは晴れず、それ以上待っても無駄なようだったので、40分後に三国山に向けて歩を進める。まずはシールを外して明王の禿の西側コルまでの大斜面の滑降。視界はきかないが、なかなか気持ちがいい。再びシールを装着して、明王の禿の奇怪な岩峰・断崖を眺めた後、三国山へ向けてさらに歩を進めていると、嬉しいことにガスがだんだんと晴れてきた。見渡せば、あたり一面白い大斜面。そしてその中に点在する濃い緑の樹木が美しい。帰りにここを滑降できるかと思うととてもわくわくする。コルから1時間で三国山山頂に到着。眼下に広がる絶景に幸せな気分になる。ただ、赤坂山山頂は依然ガスの中だ。30分近く休憩した後、気持ちの良い斜面を滑降して先ほどのコルに降り立つと、登ってくるときには見えなかった琵琶湖も眼下に広がり、それにも感動。再びシールで赤坂山に戻り、ガスが晴れるのを期待する。三国山からここまでも、登り降り含めてちょうど1時間。

　10数分休憩してガスがだいぶ晴れてきた頃、栗柄越方向への大斜面を、手を振ってくれる登山者の脇を通過しながら、気持ち良く滑降。至福のひと時。栗柄越一帯を過ぎると尾根は狭まり、斜度も増すが、雪質は悪くはなく、さほど難しい斜面ではない。登ってくる登山者とすれ違い、下山する登山者たちを追い越し、さらには（初級者だったのか、スノーボードには不向きな斜面だったのか）歩いて降るボーダーたちの脇も通過しながら、順調に高度を下げていく。問題の堰堤脇急斜面も無事クリアし、やせ尾根の緩い登り返しを通過して、赤坂山から20分で、あずまやのある広いピークに降り立った。標高差300ｍ少々、距離2km弱。ブッシュもあり一筋縄ではいかないコースではあるが、なかなか順調に降ってきた。登りと較べて約4分の1の所要時間だ。（登りと較べた場合の降りの所要時間は、歩きだと約3分の2、スキーだと約3分の1から半分と見ておくのが普通なのだが。）

　あずまやピークから下は、樹木を避ける以外、特にターンをする必要もない緩やかな降りで、ときおりスピードセーブのプルークを入れつつ、のんびりと滑って行く。そうして朝スキーを履いた地点のすぐ下まで滑り降りて、本日の滑降を終了。（あずまやピークから15分。）あとは再びスキーをザックに取り付け、運動靴に履き替えて、階段道を足取り軽く降って行く。赤坂山登山口となっているスキー場ゲレンデ上端まで10分、そして茶色い芝の広々としたゲレンデの真ん中を、降りてきた山の方を振り返りつつ、これも10分で駐車場に帰着。

　暖かい陽射しの中、雪や汗で濡れた衣類・道具を車の脇で乾かしながらのんびりしていると、朝登るときに出会った大阪の年配登山者2人組や、降る途中で追い越してきた徒歩下山のボーダー3人組も降りてきた。特にボーダー3人組は、止めた車が隣どうしだったこともあり、しばらくはバックカントリー談義に花を咲かせた。京都から来たという30歳代くらいの3人組には、私がまとめている資料を見せつつ、大山や氷ノ山など、中国山地のバックカントリーフィールドを紹介してあげた。

　山も、そして人との語らいも、いい思い出になるこのたびの滋賀県バックカントリーであった。この日の赤坂山・三国山に大満足し、翌日の天気予報が良くなかったこともあって、3日目の9日月曜日の午前中に計画していた朽木スキー場～蛇谷ヶ峰は割愛することとし、積雪不足で営業休止となっていた朽木スキー場と蛇谷ヶ峰の姿のみ偵察して、再び大阪・吹田の姉宅に泊まるべく、帰路に就いた。

　マキノからの帰りがけには、おそらくこの夏、全国からの高校生たちも目にするであろうが、一直線に長々と伸びる道路の両脇に植えられた何百本というメタセコイアの並木と、その背後に白く輝く頂の高島トレイルの山並みが、私が走らせる車を止まらせ、しばし私はそれに見入っていた。